佐伯雑記（三）

増村隆也

佐伯太郎惟定

天正六年十一月、耳川の戦に惟教父子三人の討死により、宗天の孫惟定が僅か十一才で第十四代栂牟礼城主となり、佐伯太郎権之守と言った。耳川の戦に大敗してからは日向の海辺の者は薩摩に心を寄せ、日向の三河内に要塞を構えて之に籠り、或は海賊となって佐伯の浦々に押寄せて来ることがあった。惟定は時々人数を出して之を追い払うこともあり又討取ることもあった。天正七年七月一日、佐伯の木立に海賊が押し寄せて来た時には二十六人を討取り、残る者は遠々の体で船も荷物も捨てて逃げのびて行き、その首張は臼杵の宗麟に披露された。

耳川の戦に大敗してからは大友氏の武威は昔の面影なく、豊後の諸将の多くは薩摩の武力を恐れ、薩摩に抵抗する者は一人もいなかった。この時に当り懐鬱節義を重んじ武門の面目を思い、決然として寡兵を以て剽悍無比の薩軍に当り、激戦数回大いに敵兵を破り以って士節を完うしたのは大友配下の諸将の中、佐伯惟定・志賀親次の両将があっただけである。

惟定は島津勢を孤軍奮闘して堅田の野に破り、秀吉の感謝状を貰った程であったが、秀吉の朝鮮征伐の時大友義統の失敗により、豊後国は没収され、惟定も栂牟礼の城を去り、伊予の藤堂高虎を頼って行った。英雄の最後と言うものもこれを考えて見ると哀れを一入感じせしめるものがある。

惟定の母の言葉

島津家久は天正十四年十一月二日、二千餘人を栂牟礼城に向わせ、陣僧玄西堂に十八人の侍をつけ佐伯惟定に降参を勧めに派した。玄西堂一行は弥生村切畑の門田（かんた）にやって来た時、注進により之を知った惟定は城内に一族郎党を集め、不倶戴天の敵である島津に降伏するか、一戦を交えるかの大評定を開いていた。惟定にして見れば島津は天正六年祖父・父・叔父を討たれた仇敵である。

当時十八才の弱冠で島津と一戦を交え仇を討ちたいのは山々である。然し評定に加わった重臣達は惟定の思う様に大義は明であるが、

果して島津と戦うのが得策であるか否かの問題で評定は決まらなかった。この様子を隣室で聞いていた母は、「惟定の言う所も各々が考える所も佐伯家の為であるが、家は続いても後世に汚名をのこすこともあり、家は滅びても武士の誉を挙げることもある。島津は佐伯家の仇であり大友が衰微の状態にあるからと言っても、大友の恩義を忘れ佐伯家の仇である島津に降る時は佐伯家の家名は続くであろうが、世の物笑いになることは必定であるから、武士の誉を第一に立て矢種の尽きる迄島津と戦い、城を枕に討死してはくれまいか。」と話した。この話によって評定は忽ち決まり、使者玄西堂を栂牟礼の城に入れると見せかけて番匠渕に斬る事になり、杉谷帯刀が四・五人の供をつれ玄西堂一行を迎えに行く事となった。

番匠渕に薩使を斬る

玄西堂一行は門田の腰掛茶屋で馬を降り、休息して黄粉餅を食べている所に杉谷帯刀が迎えに来た。帯刀は鄭重に挨拶して迎えに来たことを述べると、玄西堂は空嘯いて佐伯が島津に降参し佐伯が潰されさえせねば、恩義の大友を捨てて島津につくものと考え、横柄な態度を以ってこれに臨んだ。

玄西堂一行を上手に番匠渕に誘い出せば帯刀の目的は達するのである。まだ日が高かった。帯刀は言葉巧みに玄西堂等十九人の使者に酒を進めた。「日の暮れぬ内に出掛ける事にしょう」と言って玄西堂が腰を上げた時は日は既に西に傾いていた。一行が行列を組み終った時帯刀は松明を玄西等十九人にくばって歩き、杉谷はしんがりをつとめ城兵の一人が先頭を承って松明を振りかざし道案内をした。玄西堂は馬にゆられ良い気持に酒が廻って馬上に居眠りをし、落馬さえしなければ栂牟礼の城は独りでに自分の懐に飛び込んで来るものと油断していた。番匠渕にかかると一行の持った松明を川に投げ大きな松明に換えさせた。殿（しんがり）をつとめている大兵肥満の杉谷を乗せている馬は遅れがちであった。行手の番匠渕までは一本道であり、そこには伏兵が待っている。その時物凄い叫喚が起り斬合が始まり、一行は十九人の内十八人迄討取られ、甲斐宮内なる者がしんがりの杉谷になぐられて番匠渕に落ち込み、水泳の達人であったのを幸に番匠渕をくぐって対岸に泳ぎつき、その状況を義久に報告した。

堅田の戦（一）

天正十四年十一月三日、島津家久は佐伯が薩使を斬った事を知って非常に怒り、栂牟礼の城を攻め落し惟定の首を見ずんばあるべからずと、日州、薩州の軍勢二千余をひきいて佐伯の羅（とどろ）に着き、四日岸河内の農家に火をつけ堅田の城村まで押し寄せて来た。城村から佐伯氏の居城栂牟礼の城まで三里の距離にあるが、栂牟礼の城では放

火の煙を遙かに見て敵が押し寄せたとは知らず、如何なる過まちで出来た火事であろうと言い合っていた。軍監小田土佐入道匡徳はこの煙を見て、「これは敵の放火である。早速佐伯方も軍勢を堅田の中山峠まで打ち出さねばなるまい。」と言った。惟定は勇猛果敢な大将で「然らば敵に馳せ向い暫時に蹴散らし捨てよ。」と早や打ち出そうとするのを、匡徳は呼び止め「当城の寄せ口は野津・因尾・切畑の何れもゆるがせに差し置く所ではありません。然るべき侍に仰せつくべきであります。唯一将を堅田に遣わして防ぎ、何れの持口でも弱そうな方へ軍勢を添えて、君は何時迄も城にあって謀をめぐらすべきであります。」と諫めた。惟定はその議を入れ、大坂本に三五〇騎で野津口を堅めさせ、番匠河原に三八〇騎で切畑口を支えさせ、中野村に三五〇騎で因尾口を防がせた。堅田には一八〇〇余騎を三軍に分ち、中山峠に陣を取り敵味方の強弱如何と計っていた。

堅田の戦（二）

敵は約二千余人。先陣は城村に後陣は汐月に長蛇の陣をとっていた。佐伯方は敵を泥谷（ひじや）へ追い払うことに議は決まり、因尾の士を岸河内に向わせ、堅田の先陣を城村八幡山に打って出し、先ず足軽鉄砲を進めると、敵も歩卒であしらい、其の後先陣がかかって汐月橋の辺りで暫くせり合う内に佐伯の第二陣が進んで突いてかかった。薩摩勢は堪りかねて汐月橋を渡って江頭に退いた、佐伯の後陣も城村の上、寺田から宇山の城に打ち登り馬印を押し立てた。先陣が尚も進んでかかると薩摩勢は取って返し、暫しの間支えて火の出る様に戦った。佐伯の二陣・三陣も泥谷の尾崎を廻って、長池の辺に控えていた敵の軍勢に同時にかかり生死をかけて攻め戦った。薩摩・日向の兵は長池に退いて佐伯の攻めて来るのを待っている所に、佐伯の先陣・二陣・後陣が同時に突いてかかり、茲を先途と戦う内に両軍がさっと引き人馬の息をいれさせた。土佐入道匡徳は遊軍として波越峠にいたが、波越峠で狼煙を挙げると宇山の城にいた第二陣がすわかかれと、長池口に押し寄せ敵は西野の在に引き退いた。匡徳の軍が入れ替り追いかけ追いかけ戦うと踏み止まって暫く戦い、戦っては引き遂に府坂の在まで引き退いた。敵の退却を追い佐伯軍も府坂峠を占領して追撃に移り、遂に大越まで追い出したが、既に日没で匡徳も命令を下し諸隊は栂牟礼の城に引き上げた。

因尾の穴囲

薩摩勢は栂牟礼攻撃の進路を因尾口にり、薩摩軍侵入の情報は次々と城内に入って来た。因尾の人々は一ケ所に集り熟議をこらし、栂牟礼の城に籠っては薩摩の軍勢に取囲まれて兵糧も長くは続くまい。それよりも因尾の険によって戦うにしかずと悲壮な決議をして、井上

の洞窟に籠ることになった。

天正十四年十二月上旬、堅田の戦より一ケ月後、薩摩の八百余人は因尾に侵入し民家に放火して掠奪を恣にし乱暴の限りを尽し、山々を探し一人の生捕を案内にしてこの穴囲いを破らうと押し寄せて来た。洞窟内の因尾勢は頃を見計い石綱を切って落すと、薩軍は不意を喰って百余人無惨にも打砕かれて了った。穴の中から鬨の声があがった。薩摩勢はこの要塞にこの大勢ではとても叶わぬと一時引き退いた。因尾勢は洞窟から出て無二無三に敵の中に攻め入った。その為に薩摩勢は恐れをなして散々に逃げた。

十二月十七日敵兵を討ち取れと推定の命が下った。翌十八日県の住人戸高将監を大将として卅六騎が多くの兵を従えてやって来た。待ち設けた伏兵は一時に討取った。続いて敵の一隊がやって来たが叶わぬと思ったか或は山に入り或は引返した。勝ち誇った因尾勢はこれを追討しようとしたが止めて栂牟礼の城に一同引挙げた。それからは薩摩の兵は朽網・赤岩を通って府内に行く様になった。

津久見の砦

当時津久見には鳩の浦・久保泊・深浦・越智の浦の四浦があり、鳩の浦は鳩兵部亟・同源助、久保泊は加島中務・同右馬内、深浦は加島三河守・同主殿介、越智の浦は紀主馬助・同九郎が領していた。

島津家久が豊後に攻め入った時、この四浦の侍は久保泊に城を築き屢々兵船を出して、薩摩の兵が日向から府内（大分）に行くのを討った。家久は津久見の城に度々使をやりとち河原と言う所に舟を漕ぎよせ「お城に申す子細あり、豊後国は今後恙なき事はあるまい、早く義久に同心した方がよかろう」と言った。城では島津の言を入れず試みに使者が常に舟をつける入江に樽を並べ、城から鉄砲で射って見ると十中八九は的中した。そこで使者が来たら物見せてくれ様と待っている所に敵は小舟一艘を漕ぎ寄せ、扇を上げて矢止を乞い家久の使なりと言う所を、鉄砲で射ち伏せ同時に城より押し出し小舟の十四人の者を討ちとって了った。家久の軍は、十三日兵船二百余艘を以って城に押し寄せて来た。島津勢はとち河原の入江に舟をつけ鬨の声を挙げて城を取囲み朝から正午まで鉄砲でせめたてて来た。城方の鉄砲の上手な者は大筒を次々と打ち、その為に薩摩方は多くの死傷者を出し、たまりかねて堺迄引退いた。堺で指揮している敵の大将を城中から鉄砲で射ち取ってからは、薩摩勢は居たたまらず引き上げて了った。

然し薩摩方が再びこの恨みを報いるべく必ず大勢攻め寄せて来るものと覚悟して臼杵の宗麟に注進し、鉄砲二百挺と兵糧を十分に貰い受けて敵を待ったが再び来なかった。

佐伯肩衡茶入

佐伯の肩衙（カタヒラ）茶入は初め室町将軍義輝（よしてる）が何かの恩賞に大友宗麟に与え、宗麟が後にその臣臼杵紹忠（しょうせつ）に与えたものであった。天正十四年島津義久が豊後に乱入し府内（大分）でこれを掠奪した。天正十五年三月、秀吉が三十万の大兵を率いて島津討伐に乗り出すと、これを知った島津の兵は秀吉の大軍に攻められては一大事と、取るものも取りあえず薩摩を指して逃げ帰った。その一隊が豊後と日向の境重岡村の梓峠に差しかかった時、佐伯惟定は宇目の朝日岳城に陣取りその勢二千余騎を以って梓峠につめ寄せ、登り来る敵を矢・鉄砲で攻め立て三百余人を討ち取り、佐伯方も大将泥谷左京進が討死してこの戦は引き分けとなったが、この戦で島津の捨てて逃げた櫃の中にこの茶入が入っていた。惟定は非常に喜んで秘蔵していたが、その後朝鮮征伐で大友義統が小西行長の急を救わなかった事が秀吉の怒に触れ豊後の国を没収され、その麾下佐伯惟定も失意の内に朝鮮から帰り、栂牟礼の城を後に宇和島の藤堂高虎のもとに寄食する身となった時、惟定はこの茶入を高虎に贈った。高虎はこれを其の子高次に伝え、高次は之を幕府に献上し、佐伯の肩衙（かたひら）と云われ柳営の御物となった。天正の昔秀吉が茶道を奨励し茶道が漸く盛んになって来た当時、惟定が既にこの名器を得て茶道に精進したであろう事は佐伯文化史上特筆すべき事であろう。

七八　佐伯惟教の墓鶴崎にあり

昭和二十六年十一月、別府流川の某旅館で開かれた朝日の「座談会」から拾った生きている座談会」に出席した。其の席上別府の福田紫城氏から佐伯惟教宗天の墓が鶴崎の奥の高田にあるが、知っているかとの問に対し、宗天は耳川の戦に乱軍の中に戦死した。佐伯の龍護寺に宗天の嫡子惟真の墓はあるが宗天の墓は不明であったので其旨を答えた。

偶々元鶴崎の高田村の村長首藤親人氏（八十四才）に宗天の墓があるかと聞いたのに対し「佐伯の城主の墓はないが紀伊様と言って佐伯の家老の墓は鶴崎にあり、最近寄せ墓をして当時の墓はある」と言って、最近所在地を通知して来た。

所在地　大分市鶴崎局区内下徳丸　徳丸太郎氏方

墓には

佐伯紀井入道宗天

天正六年十一月十二日　卒ス

と記してある。何故鶴崎の下徳丸にあるかと言うに、豊薩軍記には「一族郎党等百二十二人と与力徳丸河内守慎貞・仝彦三郎・恵良主計都甲孫三郎・亀井左馬助・内田孫三郎等一歩も退かず皆同じ枕に討死したりけり」と記しているのを見れば、与力徳丸河内守慎貞・仝彦三

郎の関係者が鶴崎に惟教宗天の首を持ち帰り、佐伯の城主とは知らず葬って紀井様と言い伝へたものと思われる。

天正時代の交通

天正十四・五年頃の豊後の諸城を書いた地図を見ると、栂牟礼城を起点とした五本の道が書いてある。その一つは栂牟礼から竪田に出て其より二つに分れ、その一つは日向の三河内（みかわうち）に行き、一つは岸河内（きしかわち）を経て日向の轟（とどろ）に行くものである。その二は栂牟礼から切畑を経て宇目の朝日嶽城に行くもの、その三は上野から因尾に行くもの、その四は栂牟礼から野津院に出てそこから二つに分れ、その一つは松尾山・利光を経て府内（大分）に行くもの、今一つは野津院から岩瀬・王子を経て臼杵に行くもの、その五は栂牟礼から床木を経て津久見に行き臼杵に出て府内に行くものである。これより当時の交通の中心は栂牟礼であったと云ってよい。

徳川時代の中期佐伯藩主六代毛利高慶が享和三年幕府に出した書類には、

一、領分中の儀は他領より往還通路御座なく候に付、旅宿・馬継（うまつぎ）等仕り候場所は御座無く候。

一、領分中湊と唱へ候船着き御座なく候。去り乍ら領分より西方の御大名様方時に寄る御船湛りなされ候場所、又は諸売船等風烈しく浪荒れ砌は滞船仕り候場所浦方に四・五ケ所も御座候。

と書いてあるものを見ると交通は天正時代も徳川時代中期も殆ど同じであったと云ってよい。

浜の神様

下梶寄（かじよせ）の浜の神様と称する所に昔から長曽我部の一族が四国を逃れ梶寄に落ちて来た時、四国から持って来た茶椀道具が埋めてあると云い伝えられていた。伝え聞いた東京の某大学の教授は学究の為か好奇心か浜の神様を発掘すると口碑の通り立派な茶器が出て来た。教授は喜んでそれを東京に持ち帰り自慢していたが間もなく死に、引き続いて一人娘も又病床の人となった。夫人はあまりの不運続きに悲歎して占って貰うと、深く祕められていた重宝を発掘して、家に持ち帰ってはいなかったかと占者は夫人に問うた。夫人は下梶寄の茶器の事を思い出し、家に祕蔵の茶器を持参し鶴見崎神社の裏に埋めると不思議に娘は全快した。然し村人はその茶器を元の墓に埋めるがよかろうと再び下梶寄の普通浜の神様と呼ぶ墓に埋めた。浜の神様の祭は正月・六月の二十八日に行なわれている。副葬品として埋めた祕蔵器を発掘して持ち帰った祟りであろうか。

つる姫

昔つる姫と云う世にも稀な美人がいた。つる姫に求婚する多くの男の中に、最もくどくつきまとって求婚する一人の男があった。然しつる姫には相愛の仲の男があり、くどく口説かれれば口説かれる程その男が嫌になった。然しその男はどこ迄も意地を通そうとし、万一こちらの希望を入れねば殺すと迄云うようになった。つる姫は恐ろしさに館を出ていずれともなく落ちて行った。姫は遂に明治村（弥生村）の尺間迄逃れて来て石原の百姓の家にたどりつき、事情を打ちあけて暫くの間かくまって呉れと白銅を盆一杯出して老爺に頼み込んだ、老爺は白銅を見ると即座に姫の希望を入れて裏の竹籔の中にある洞窟に姫をかくした。間もなく姫の行方をしっこく探していた男は石原の老爺の元に尋ねて来て、白銅を盆に二杯を出して姫の行方を教えてくれと頼んだ。老爺はその金に目がくらみ約束を反古にして姫のもとに案内した。男はしっこく求婚したが、姫は頑として聞き入れなかった。男は気狂の如くに怒り、姫の生爪をはぎ、歯を抜き姫をさかずりにして火あぶりにして殺してしまい、あの世で姫と夫婦になるからとその場で自殺をしてしまった。村人は備後（びご）の原に姫を埋め一本杉を植え、この岡から川を距てて見える長畑の岡の原に、男を埋め一本杉を植え、共に石碑を立てて悲恋の二人を祀った。つる姫の墓には爪の痛む者歯の痛む者の参詣する者が多いと云う。

（八六頁より続く）

子ト共ニ家ニ帰レリ。道程二里半ナリ。」

大島村や福島村を通って、柚ノ木――久大線豊後中川駅の裏の台地丸山小学校附近――についた。同人小関亨の父玄珪の宅で歓待されている時に、月化は知友郡代陣屋の役人、坂田祐八が明日は江戸に出発すると言ふ報せで急遽、二里半の夜道を秋風庵に帰った。二十二日に淡窓は柚の木から帰り、月化は坂田祐八の東上の行を送ったであろう。そして二日おいた二十五日に、三日（四日の予定であったが）にわたる紀行を書きあげたものと思われる。五馬紀行も懐旧楼筆記も、人物も地名も経路も一致していて、その筆跡文体等と共に月化を偲ばせるものである。只、同行者で二十一日夜に月化と行を共にしたものは、懐旧楼筆記によれば、伊織・大路・正蔵・俊民の四名であり、紀行によれば大路・伊織・正蔵となっていて俊民は虚舟・亨・蘭秀と残った事になっている。

なお、紀行の大部分は前掲の通りであるが、読み易いために文字・仮名遣いに若干の修正をなし、句読点もつけた。更にこの拙稿を草するに当って、広瀬恒太氏の御示教を仰いだ点の多い事を附記する。

註1　豊後国志には古駅、風土記所称。今尚存。

註2　豊後国志、上井手渡。在刃連郷上井手村。